

せせがむい

発行・古平町史編纂委員会
編集・古平町史編纂室
—— 第四号 ——
平成二年二月一日

古平町の地名

近藤 芳二

二、トマリエサン・トマルサン

この地名は松浦日誌（弘化三年）に、「此湾右の方丸山サキ左リイカウシとして一湾をなす並てトマリエサン。同番屋有り夷人小屋有り。図合い懸かり間よし。のろ火場有る也。又此ところより山道。運上屋元へ行によろし」、この記述からおおよその場所は分かった。

明治二十五年の地図にはこの地名はなく、明治二十九年の地図に、「トマルサン」とある。具体的にこの地名はどこを指

すのか、またどんな意味をもっているのか見当がつかなかったが、最近になって、丸山の裏側丸山トンネルの美国側の出口の前の海とわかった。

アイヌ語としては「トマリーあさむ（入り江の奥）」

※ トマリエサン・トマルサンなどは、トマリアサムの名まじったものであろう。古平地方のアイヌ語地名を記録した第一人者は、幕末の探検家松浦武四郎である。彼は北海道を六回探検している内、二回だけ積丹地方を陸路で通っている。その記録は二点あるが省略する。

三、カムイノカバエ

松浦日誌では、「カムイノカバエ此上を丸山と云、すりばちをふせし如き山也、此所山越有丸山越と云。」また、西えぞ日

誌では、「さてトマリサンより舟にて廻れば（二町五間）カムイノカマイ（岩磯）」とある。この記述でおおよその場所が推定される。しかし、この地名にどんな意味があるのか、現在のところ不明である。

四、アツホロ・アツホウシ

再航日誌では、カムイノカバエを過ぎ、「さて、浜通りはアツホロ、岸壁。大岩道。道わるし。並てカムイシレハ、丸山岬也。」

丸山の裏側を、トマリエサンーカムイノカバエーアツホロー丸山岬と、地名が並んでいることになる。

五、丸山岬 カマイシレバ

永田地名解、松浦日誌いずれも「カムイシレバ」となっている。明治二十五年の地図では「丸山崎」となっている。明治二十九年の地図では、単に「丸山」とだけ記されている。

えぞ日誌では、「カムイシリハ（大岩）此ところ丸山岬の鼻にして、奇石怪岩累々として、心霊著しき由にて木幣を立てたり。廻りて（七町二十五間）モヤサンえ出る。」

カムイシレバ、または、カムイシレバ（神の岬）という意味である。

※ シルバーみさきという意味で、原義は「海中に突き出ている山の頭」である。
（古平小学校・教諭）

△7月の山山並木車

△△△△△△△△△△△△△△

■大正天皇大喪遥拜式を小学校で行う（昭和二年）

■古平町会傍聴取締規則が制定される（三年）

■余市・古平間定期船末広丸が中△の浜で座礁する（四年）

■激浪のため港内で漁船一隻沈没、人命に異状なし（五年）

■古平産の明太魚が粗悪で市場から締め出しをくう（九年）

故郷を想ひ

福井寺平

てんごさん（天狗のこと）の火くぐりは、今も昔も変わらな
いが、当時の面は、あの炎の周
りで舞う様は、怒ったり、微笑
したり、なにか歌舞伎俳優を思
わせる演技力があつたようで、
私の記憶では、沢田某さんが一
番印象にのこっている。行列も
やつこ、みこし、馬も出た。そ
して、若者の数も、また勢いも
あつたようだ。
祭りの前日になると、天狗さ
んの歩く道路の中央に、砂か火
山灰をラインのように敷いたり
した。洗濯物を外に出しておい
たり、二階から顔を出したりす
ると天狗さんが怒って止まるの
で、皆んなで注意し合い、前を
横切るようなこともなかった。
昔のことばかりで申し訳ない
が、桜の季節には④さんの公園
にも歩いて行つたし、秋になる
と観音さんの滝までも歩いて行

つた。子ども心にもあの滝はテ
ツカク見えたし、行く道すがら
地藏さんに頭を下げて何を拜ん
だのか——。観音さんでは、
蛙の入った大きな鍋から、はら
いっばいご馳走になつたことを
よく覚えてる。大人達はお酒を

幸にも (大正 昭和)

新聞社が二社

古平では以前、地域の新聞が
発行されたことがあるが、この
ことはあまり知られていない。
ひとつには、経営が思わしく
なく、短期間で止めてしまつた
からであろう。

古美特報

「古美新聞」は、大正九年三
月、浜町四八、古美時報社（発
行・印刷・編集人斎藤広作）か
ら発行され、A3判（電話帖の
倍）四ページ、一か月の購読料
は月三回発行で十銭であつた。

呑んでいて、たいしたご機嫌だ
つたようだ。今で言えばカラオ
ケ、あの頃は芸者さん達が踊つ
たり、三味線、太鼓でみんなが
楽しく歌い踊っていたが、いつ
の世も似たものか。

以下次号——



「丹岬新聞」は、昭和八年八
月、浜町四二、丹岬時報社（発
行・編集・印刷人女鹿雄太郎）
から発行され、さきの古美新聞
の半分の大きさでやはり四ペー
ジ、一か月の購読料は月三回発
行で十五銭である。

丹岬新聞の第八号には、「二
か月も読んでおきながら、新地
町の某先生とも言われ、しかも
高等学校を出た有識者とももく
される人がこともあろうに『こ
んな新聞を発行しておいて金を
取るなどインチキだ』と、暴言
をはいた——」。という記事も
出ている。

- 町会議員の選挙正祈願を琴平神社で行う（一一年）
- 古平信金が伊勢参宮預金の取り扱いを始める（同年）
- 民謡作家でもあつた郷社宮司竹内白雨が死去（一二年）
- 古平小学校鴨居木分校が明和尋常小学校と改称（一五年）
- 戦争のため味噌・醤油が切符制になる（一七年）
- シンガポール陥落により奉祝旗行列を行う（同年）
- 明和尋常小学校に校旗が寄贈される（一八年）
- 雪崩で稲倉石小学校の一部が倒壊する（二十年）
- すけそ操業をめぐる紛争が起きる（二一年）
- 古平中学校校歌が制定され発表会を開く（二三年）
- 稲倉石小・中学校校章が制定される（二七年）
- 古平町納税貯蓄組合が設立され六組合が結成（二九年）
- 雄冬たら場で古平漁船の密漁が発覚する（三一年）
- 出足平ワッカケ隧道落磐事故で須貝光雄が死亡（同年）



『豊漁祈願』で縁のある

善宝寺

山形県鶴岡市

自然を相手とする生業についている人は、今も昔も信仰が厚い。特に「板子一枚下は地獄」といわれ、年に一度の鯨漁に生活を賭ける漁場の親方は、豊漁への期待をこめてそれぞれの信仰をもっていった。

その中に、開山以来六百年の歴史と由緒を誇る《善宝寺》がある。現在も古平では信仰する人が多いが、明治の初め頃から既に豊漁祈願の祈禱が行われ、かなりの往来があったことがうかがわれる。

明治十五年十月、古平郡では

金五円也 吉田幸右工門

金五円也 種田 金十郎

金五円也 種田幸右工門

の三人が、他の町村分と合わせて金百円也を寄進したことが境内の碑に記されている。左図のものは、昨年十二月にその碑の拓本をとって、善宝寺から送ってもらったものである。

後志ふ古平郡古平

金五円 吉里幸右門

金五円 種田金十郎

金五円 種田幸右門

當山三世
禪山代

昭和十五年六月十二日には、更に次の人たちが「大漁祈願」の寄進をしている。

北海道古平港

本間 権平 本間権一郎

大地 与一 本間 与蔵

八幡 常一 八幡 昇一

徳田 音吉 本間 久治

宮下 長作 高松 三悦

長谷川健治 三好富之助

以上十二人で、金三百円を寄進したことが、樺の板(百七センチ×七十五センチ)に書かれていて、以前は本堂に掲額されていたが、改築によって現在は取り外されたままになっているということである。

昔は、春になると善宝寺から役僧が来て各漁家を回ってはお祈禱をし、家々では酒食のもてなしをしたという。

「大正八年五月、善宝寺役僧 祈禱お布施料 五十銭」という、鯨漁場の記録がある。

現在は、善宝寺からの僧侶を招いて、漁港会館で合同の祈願祭を行っている。昨年は、十月二十八日に六人の僧侶を招き、百戸余りが参加して祈願祭を行っている。

余談になるが、鯨建場を持つ親方の中には、自分の敷地内に祠(ほこら)を建て信仰する人もいて、丸山下(御崎町側)に建っている稲荷さんは、かつて種田家が建立したものである。

■古平漁協に超短波無線電話が設置される (同年)

■HBCが古平で録音した「鯨場をしのぶ」放送(三四年)

■STVテレビが古平の開発関係工事を放映する(三五年)

■医療単価問題で全国の医師が一斉休診をする(三六年)

■古平中学校第二期工事の竣工式を行う (同年)

■稲倉石PTA機関紙「山峡」を発行する (三七年)

■NHKテレビ「たら場に働く人々」古平で撮影(三九年)

■古平剣道スポーツ少年団を結成する (四三年)

■激浪のため古平漁港防波堤が被害をうける (四四年)

■鉄興社が稲倉石鉱山を売却しPTAがお別れ会(四五年)

■第一回道民スポーツ後志冬季大会に参加する (四八年)

■第一回古平町民冬季スポーツ大会を開く (四九年)



『石高』のない松前藩
なぜ 鯨は『石』か？

幕府のもとにあって蝦夷地を支配した松前藩は、七千石から一万石という大名の格式はあったものの、米が全くとれない土地であってみれば、いくら一万石をもらってもその「石高」は空手形でしかなかったが、そのかわり蝦夷地で「商場（あきなえば）」を持って、そこで商売をする権利を得たのである。家来たちにしても給与は知行としての米はもらえないが、その土地での「商場」をもらい、税をとったり、アイヌと物々交換したものを商人に売って利益を得ていた。それが知行であったわけである。米は本州の四倍の値段で売れ、鮭百尾と米一斗二升が交換の比率であった。しかし、商売の方はしよせん武士の商法でうまくいかず、商人から借金をしてはそれがどん

どん増えていくばかりでどうにもならなくなった。藩の財政も苦しくなり、そこで考え出されたのが、「商場」を一定の料金をとつて商人に請負わせる場所請負制であった。初めの頃の請負人は近江商人で、古平場所を請負ったのが、初代岡田三右衛門である。また、古平の知行主は新井田喜内であったが、運上金をもらうサラリーマンになってしまっ

たのである。ところで、当時から海産物に用いては「石」という単位が使われ、運上屋での取り引きも、鯨・鮭・鱒・昆布などは「石」が使われていた。重さの単位としては「貫」が使われていたのに、蝦夷地ではどうして「石」が使われていたのだろうか。これは、先の松前藩が石高のない大名であったことによるもの

ので、鯨の目方を米に換算してそれに相当する鯨の目方を決めたというのである。まず、米一石（約百八十リツトル）の重さは四十貫（約百五十キロ）で、これと同じ目方の身欠きを一石とした。これだけの身欠きをつくるには、およそ五倍の鯨がいるので、鯨一石＝二百貫＝七百五十キロと、いうことになる。中形の鯨で一尾二百五十グラムとすれば、一石は三千尾となる。大正以降、古平で最も大漁だった大正九年は七万石とれた。今、これを日本国中の人に分けると、一人二尾にちょっと足りない程の量なのである。

お礼とお願ひ

- ▼本間銀朔さん
古平町広報 第一号より
- ▼盛 林三郎さん
長見商店諸帳簿類
明治四十年以降 十四冊
- ▼大島敏子さん
番 傘 二本（屋号入り）
- ▼堀 智子さん
ドンザ（昔の作業衣）

▼高野名正治さん

- ▼高野名正治さん
大正八年、昭和四年から同十九年までの、父・高野名 幸作さんの日記
- ▼高橋健一さん
鉄興社社内報『ていけい』
昭和三十八年から同四十五年（稲倉石鉱山廃鉱まで）
それぞれに貴重な資料として
ご寄贈をいただいたり、また、お借りすることが出来て大変参考になりました。紙上からもお礼を申し上げます。どのような資料でも、お持ちでしたらお知らせ下さい。

あとがき

、当初、隔月で発行する予定でしたが、これをご覧になった方々からご助言やご援助をいただきまして、創刊から毎月発行することに致しました。関心をお持ちいただければ幸いです。